

本 森まゆみ 著

『森のなかのスタジアム 新国立競技場暴走を考える』

「無責任体質」の全貌浮き彫り

本書に記されているのは、建築家・横文彦さんの論文に励まされ、2013年10月から動きだした「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」の2年間の詳細な活動記録と、それによって浮かび上がった建設計画の「無責任体質」の全貌だ。

文科省の第三者委員会による報告が9月24日、行なわれた。これに対し、著者が共同代表を務める「手わたす会」は、「コスト

について国民に言い訳するための検証に矮小（わいしょう）化されている」と声明を発表した。東日本大震災からの復興やコンバクトさを訴えながら勝ち取った五輪が、それとは裏腹に被災地の労働力や資材を奪う。さらに競技場経営でのスポーツ事業の赤字をその他の文化事業で補てんするとは本末転倒。その数字も詐術で覆われ、裏には都心再開発のもくろみが隠れている。

森さんは国際オリンピック委員会の「アジェンダ2020」に従い、既存スタジアムの改修で五輪を開催し、風致地区としての神宮外苑を「森は森のままに」残し、手を付けないことを訴える。国家プロジェクトを白紙撤回させた原動力、11人の女性の人間ドラマも興味深い。

(1)

森のなかの スタジアム

著者の



日本の民主主義とは「聞かない民主主義」なのか。新国立競技場建設をめぐる騒ぎの全貌と課題を明らかにする。次世代のために立ち上がった市民たちの活動記録。

みすず書房

▷みすず書房
▷本体2400円+税